

2度の革命で ウィーン体制が崩壊



ウィーン体制で抑え込まれた自由主義とナショナリズムは、革命の波を生み出し、ヨーロッパ各地に飛び火する。

フランスの七月・二月革命が、ヨーロッパ各地へ波及

フランスではウィーン体制により王政が復活し、シャルル10世の反動政治が自由主義者との対立を生んでいた。1830年の選挙で自由主義者が勢力を伸ばすと、国王は議会を解散したため、パリで民衆が蜂起。3日間にわたる市街戦の末、国王は海外へ亡命した。これが七月革命である。革命後、自由主義派のルイ・フィリップが国王に選ばれ、七月王政が始まるが、新国王も銀行や資本家を保護したため、民衆の不満は消えなかった。

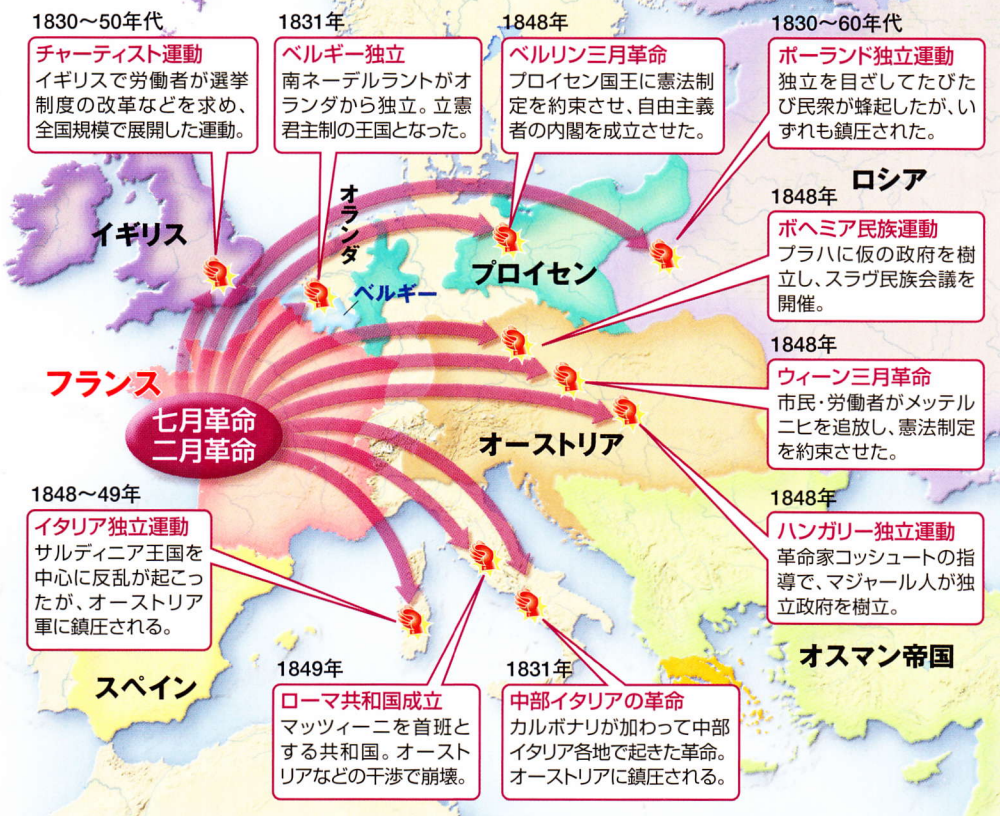
七月革命の影響はヨーロッパ各地に及び、ベルギーが独立したほか、イタリアやドイツでは立憲政治を求める運動となつて現れた。

48年、フランスで普通選挙を求める運動が政府によって弾圧されると、再びパリの民衆が蜂起し、国王を退位させて臨時政府を樹立、第二共和政を宣言した。これを二月革命という。しかし、臨時政府は保守化し、改正後の憲法下で実施された大統領選挙では、ナポレオンの甥のルイ・ナポレオン（のちの皇帝ナポレオン3世）が当選した。

二月革命もまた、ヨーロッパ各国で革命や自由主義運動を誘発し、ここにウィーン体制は崩壊する。

フランス七月・二月革命の影響

フランスでの2度の革命がヨーロッパの自由主義やナショナリズムを高揚させ、ウィーン体制を崩壊させた。



社会主義思想の成立

各国で産業革命が進み、資本主義経済が発達すると、資本家の搾取や経済的不平等などの問題が浮き彫りとなった。そして、資本主義の原則である自由競争や私的所有権を制限しないのは廃止し、労働者が協同・連帯することで平等かつ公正な共同社会の実現を目指す社会主義思想が生まれた。

イギリスではロバート・オーウエンが、生産活動を社会全体で管理することによる、平等な共同社会の実現を提唱した。また、ドイツのマルクスとエンゲルスは、労働者の団結と革命による平等社会の実現を訴える『共産党宣言』、資本主義経済の構造を解明する『資本論』を著した。

社会主義思想は、19世紀後半から20世紀にかけて全世界に大きな影響を及ぼし、ソ連や中国などの社会主義国家を生み出すこととなる。

社会主義革命の一般的な図式



Key Word ナポレオン3世 [1808~73年]

フランス第二帝政の皇帝。ナポレオン1世の甥。1848年の二月革命を機に政界に進出、国民の人気を得て大統領に就任した。51年、クーデタで議会を解散し、翌年の国民投票で帝位に就く。当初の独裁から自由主義勢力への譲歩へと転換する一方、対外膨張政策をとるが、普仏戦争に敗れて退位。イギリスに亡命した。